

も六貫目もするユイがいて、サシミにするとトロよりうまいといっている。また大きく、グラリグラリと来た。それが、六月十七日の根室沖地震の余震だったのだ。

東京に帰って「アビ」を調べると、鳥のアビは「阿比」と書き、アビキョウカンの「アビ」は「阿鼻」と書く。梵語ぼんごで死後の八大地獄のうちのひとつであるそうなの。

六月二十四日に、釧路にまた大きな地震があったと、翌日の朝刊に載っていた。

## 浪花芸人横丁の御隠居

芸人が何時の間にか芸術家になっちまう時代である。良い意味での芸人気質と芸は、やはりこんな横丁からしか生れないのではないだろうか。松鶴家団之助さんおんすけはひたすらそう思い続けて生きてきた。

ハツアン熊さん、それに与太郎、そんな連中が相談ごとに行くところといえば、横丁のご隠居さんのところにきまっている。

通天閣のある新世界から、ジャンジャン横丁のホルモン焼のにおいをかぎながら、飛田の方へ歩いて行くと山王町へ出る。

たしかこのあたりだったはずだが、と酒屋の若奥さんに聞いてみると「サー、ここらにそんな所あったんかいナ。そういうたら、ときどきやけど、平和ラッパさんが歩いてはりまんナ」とたよりない。

芸人横丁はどう行けばいいんですか、なんて聞いた方が悪いのだから仕方がない。そんな住所があって地図ののっているわけもないのだし、だいいち、芸人なんて言葉すらあまり通じなくなっているこのごろである。

電話帳をしらべてかけてみる。「そりゃあんたはん、郵便局のマウラでんがな」という返事。なんのことはない、ひと筋むこうのかどだった。

棟割り長屋の暗い路地を右にまがってしばらく歩くと、小さな地藏さんがあって、上の方に団之助

芸能社という看板がぼんやりと見えた。こっちは与太郎になった感じで表の戸をあける。ご隠居は、ちょうどテレビを見ているところであった。コタツの横にタンスがあり、その上にテレビがのっかっているものだから、ご隠居は首をななめ右にかなりひねってテレビを見るかっこうになる。

松鶴家団之助さん、七十三歳。浪花芸人横丁のご隠居さんである。

明治三十二年に大阪の玉造に生れ、十五歳で浪曲師宮川金丸の弟子になり、大和路を三年間、これひとつしか語れない「谷風棍之助の少年時代」をうなずいてまわった。

「あまりのへたくそに、自分であいそがつきて」大阪にわか松鶴家団蔵の弟子になったのが大正五年だった。

この大阪にわかの一団には、十人ぐらいの人がいて、ボテカツラという紙で作ったカツラをかぶり、歌舞伎のパロディーから浄瑠璃までなんでもやった。

昔の漫才というのは、歌と踊りに物まね芝居、それにおしゃべりと、なんでもやったのだ。というより、なんでもできなきや漫才ではなかった。現在のようにシャベクリ漫才になったのは、エンタツ・アチャコが出た昭和七年ごろからののだ。

なんでも漫才の元祖は、玉子屋円辰という行商の玉子売りだったというからおもしろい。円辰が出たのが明治の末、だったというから、浪花漫才の歴史はあんがい新しいのである。

大正七年に、にわかから漫才師になって、やめたのが昭和の三十三年。

およそ四十年にわたる漫才人生だった。

大正七年から五年間は、大阪天満の吉川館で漫才七組の一団の座長として活躍した。松鶴家団之助の青年時代であった。



遊ばないヤツは芸人じゃない、といわれるほど芸人はよく遊んだ。むろん酒と女である。

大正十二年の関東大震災のときは、東京で七軒町の大森座に出ていた。そのころの給料が四十円。「震災で吉原も焼けてしまいました。わたしたちはその前の晩に遊んだんですから、いい時代の最後の吉原をみたことになりませう」としんみりする。

大正十五年の十一月、団之助さんは当時日の出の勢いの吉本興業にはいることになる。昼夜二回、一日四回の興行だからたまったものではない。漫才はもちろん自作自演、マンガ本や日常のバカ話からネタをひろって作るのだが、芸妓や幫間と遊ぶのがなによりも勉強になったという。

しかし、ひどいスケジュールで、しまいには、やることがなくなつて、往生したそう。

団之助さんの部屋には「笑」という一字だけの額がかけてある。まさに笑いのためのみの人生だったのだ。自作の漫才といっても、ある程度のスジ書きがあるだけで、ほとんどが即興だったのだから、きびしい客の前ではめつたなことはできない。密度の濃い笑いを作るためには、なみたいていのことではなかった。

当時、和歌山の朝日座といえ、客のきびしいことで有名で、漫才師の鬼門のように思われていた。寄席といえ、マスの座席だったから、へたをやると「ヤメトケ、ヤメトケ」と客がゲタでマスのふちをたたき、それが一人から二人三人、やがては小屋中がこのヤメトケ、ヤメトケの大合唱。それでも油汗タラタラで高座にがんばる芸人は、死ぬ思いだった。その朝日座で、団之助さんは大阪ではやっていた淡海節をやつて、大ウケにウケたのだ。これも芸者と遊んでいるうちにおぼえたものだったというから、まさに遊び、さまざまだったのであろう。

そんな意味で、なくなった柳家三亀松こそ芸人中の芸人だった。それによく遊ばせてもらいました、と団之助さんは目を細めた。

昭和二十年八月、松鶴家団之助一座は広島を巡業していた。

歌謡曲、漫才、踊りの一座二十二人のうち、原爆でたすかったのは、団之助さんと使いに出ているオカミさんの金田秀子さんだけだったのである。宿屋の下敷きになって苦しんでいた三人を助けるのがせいっぱいだったという団之助さんの首すじには、まだケロイドが少し残っている。その三人も間もなくなくなり、一座はほぼ全滅してしまったのである。

戦争中は工場や軍隊の慰問に回り、戦争ものや軍記ものを強制されて、笑いどころじゃなかった。京都の伏見では、芸者のまねをしてスネ出しただけで、警察に呼ばれる騒ぎだったのだ。

しかし「芸人やって麦飯食ったことなかった」という通り、戦後、新しい一座をつくって地方の村祭やら青年団のアトラクションに出ると、出演料のかわりにお米をくれたりすることが多かったのだ。戦前は、中国、台湾、朝鮮にまで足をのばしたが、どうしたわけか北海道だけは行っていなかった。団之助さんがいまの所に住んだのが昭和の初め。焼け残った長屋に芸人たちが住むようになったのが二十一年ごろからで、三十年ごろには、芸人だけで三百人をこしたという。皆この一帯を芸人横丁などと呼ぶ、天王寺村といっている。

二十九年ごろから始めた芸人の口入れを、三十三年から本格的に開始した。ちょうど芸人横丁の最盛期だったころである。

現在、この天王寺村に住んでいる芸人さんたちは、およそ八十人、平均年齢は六十をこえている。たくさんさんのスターを生んだ芸人横丁も、さびしくなった。しかし、団之助さんは「芸人は人情や」といい切る。いま、この芸人さんたちのおもな仕事場は、農協や敬老会のアトラクション、それに春祭と秋祭に出ることである。

# 流民烈伝

風のなかの旅人たち

一九七七年一月二五日

著者——朝倉俊博

発行者——井口孝一

発行所——株式会社白川書院

東京都新宿区左門町三十四

☎〇三―三三三―三三四四

〒一六〇

振替東京九―一七六四五〇

京都市左京区北白川追分町八七

☎〇七五―七八一―三九八〇

〒六〇六

振替京都九二二―

印刷所——大進印刷株式会社

製本所——中村製本株式会社

© T. ASAKURA 1977

## 朝倉俊博

(あさくらとしひろ) 昭和十六年九月東京生れ、早大教育学部中退。

フリーカメラマン。他雑文、雑誌編集、映画撮影、シナリオ、童話とやたら手を出している。

一番気に入っている職業名はルンペン稼業。一人の女の亭主であり三人の息子の父親でもある。

野豚の会会員。流民通信社代表。